

2 各府県市による実践報告

③「統計から予測するいじめ重大事態発生校～予測プログラムの開発へ～」

堺市教育委員会事務局 学校教育部 生徒指導課
指導主事 木田 哲生

①目的→いじめ重大事態発生校の傾向を把握し、今後の予防対策を効果的に行う。

②方法→・市内で発生したいじめ重大事態を対象。

・発生校における、いじめ、暴力行為、不登校、長期欠席の4項目を市内全体の過去10年のデータ（発生校を除く）と比較。

・結果をもとに、「予測プログラム」の開発。

③結果、考察

(1) いじめ

・重大事態発生の直近3年間で、いじめ認知率が有意に急上昇する。



認知率の上昇の原因が、積極的認知なのか、事実としてあるいじめなのか、丁寧に判断する。
事実としてのいじめを放置しない。重大事態に進展する。
積極的認知でも対応を誤ると重大事態に進展することもある。

(2) 暴力行為

・発生校は暴力行為発生率が低い傾向にあり、特に小学校では有意に低い。

・発生中学校では重大事態発生の直近5年間に暴力行為が急増する年が共通して見られる。



暴力行為発生率の低い学校は「本校は落ち着いている」という認識を抱きやすい。中学校においては、激しい暴力行為に慣らされた眼には力の行使を伴わないコミュニケーション系のいじめがいじめとして認識されにくい傾向があり、結果重大事態に発展すると推察される。

(3) 不登校

・発生校の不登校出現率は有意に低い。

・重大事態発生の直近3年間で、不登校出現率が有意に急上昇する。

長期欠席

・発生校の長期欠席出現率は有意に低い。

・重大事態発生の直近3年間で、長期欠席出現率が急上昇する傾向（有意差なし）



不登校及び長期欠席の出現率が低い傾向。
直近3年間で上昇する傾向。
学校が安全安心な場所でなくなり、居場所としての機能低下。

○重大事態発生校の傾向（まとめ）

①暴力行為の発生率，不登校・長期欠席の出現率が低い。

⇒荒れている学校<落ち着いている学校。
⇒「本校は落ち着いている」という認識を抱きやすい。

②重大事態発生の直近3年間で，「いじめ，不登校，長期欠席」が急上昇する。

⇒①の傾向により，急上昇を見逃しやすい。
⇒重大事態はいじめ以外の項目と関連あり。

○「予測プログラム」の開発

- ・自分の学校がどれくらい重大事態が発生する傾向があるのか知る。
- ・不登校児童生徒数など入力することで，「赤」「黄」「青」の3段階で評価。
- ・今後の取組について各項目（不登校，長欠など）のコメントが出る。



主観的評価＋客観的評価の組み合わせ

○今後の課題

- ・学校が予防対策に向け行動を起こすことが重要。
⇒指導主事，SC，SSW等の専門家，いじめ対応チームの派遣
- ・重大事態に発展する可能性が高い事案。
⇒専門家チームの派遣